

国際シンポジウム「時空を超える〈言葉〉—神話の翻訳をめぐる—」まとめ

平藤 喜久子

二〇一八年一月二〇日に國學院大學・古事記学センターでは、国際シンポジウム「時空を超える〈言葉〉—神話の翻訳をめぐる—」を開催した。

古事記学センターでは、新たな古事記の注釈、現代語訳をもとにその英訳を作成し、冊子『古事記學』、およびオンラインで公開している。古事記はすでに英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、韓国語など、各国語に翻訳されており、英語については複数回翻訳されている。それでもなお、われわれの研究成果を織り込んだ最新の古事記の翻訳を行いたいと考えての取り組みである。

翻訳の意義や訳語の選定、文体のことなど、翻訳と一言で言っても簡単なことではない。八世紀の日本の古典を現代の海外の人々に伝えるために、どのような工夫が必要か、多くの方々の力を借りて考える日々である。

今回の国際シンポジウムは、古事記の英訳に取り組む中で生じる様々な問題には、古典を現代語訳することや他言語に翻訳することに普遍的な課題が含まれているのではないかという問題意識から企画された。

基調講演は古事記の現代語訳を刊行されている作家の池澤夏樹氏にお願いをした。池澤氏は「池澤夏樹Ⅱ個人編集」として河出書房新社から日本古典文学全集全三十巻を刊行されている。その第一巻目として古事記を池澤氏本人の

訳で刊行した。その体験をもとにお話しいただいた（講演録参照）。

シンポジウムでは、パオロ・ヴィラーニ氏（イタリア・カタニア大学准教授）、アラン・ロシエ氏（フランス・国立高等研究実習院教授）、月本昭男氏（立教大学名誉教授、上智大学教授）が発題をし、その発題を受けて総合討議では池澤夏樹氏も加わり、シルヴィオ・ヴィータ氏（京都外国語大学教授）のコメントを受けて議論がなされた。

ヴィラーニ氏は、イタリア語の古事記を翻訳されている。イタリア語では、マリオ・マレガ神父、宗教史学者のラファエロ・ペッタツォーニと二度の翻訳が刊行されており、ヴィラーニ氏は三度目の翻訳に取り組まれた。その経験をもとに、もつとも苦勞した点が「神」をどう訳すかであったことなどを論じた。たとえば「く神」というように名前に神が含まれている場合、名前の一部とするか、それを敬称的なものとしてとらえるか、など日本語ではあまり問題にならないことがヨーロッパの言語では難しいテーマとなることが挙げられた。

ロシエ氏は、神話学者で古事記、日本書紀のフランス語訳に取り組んできている。発題ではフランスにおける古事記紹介の歴史が紹介された。一八世紀から一九世紀は古事記についての簡単な説明があり、それで満足していたが、一九世紀後半になると、レオン・ド・ロニのように部分的だが「翻訳」という試みがはじまる。そして二〇世紀になり、全訳が出版されるようになる。フランス語ではこれまで二度の翻訳が出されているが、いずれも学術的な観点からは問題があるものだった。その上でロシエ氏やフランソワ・マセ氏が専門家の観点から真福寺本からの翻訳に取り組むことになるが、文体のことなど課題は多く、出版には多大な勇気が必要であるという。

古事記を翻訳する場合、難しいのが神名をどうするかである。神名の漢字の意味を訳す場合と訳さずに音をローマナイズする場合がある。この問題について、ロシエ氏は、神名は訳さない方がいいと決めたという。語源が不明なも

のも多く、漢字に二次的な意味もあつたりする。わかりやすい名前ばかりではないからであると述べた。

そうした具体的な課題のほかに、翻訳の姿勢として「解釈学的な立場」の重要性が述べられた。それは、古事記がどのような機能を持ち、どのようなものであったのかということを意識するということである。たとえばそれが聖典であれば、それにふさわしい訳、文体が選ばれることになる。古事記には詩もあり、系図もあり、物語の文もある。それらがモザイクのようにできあがっている。それぞれにふさわしい文体を考える必要があると論じた。

月本氏は聖書学が専門であり、旧約聖書（ヘブライ語聖書）の翻訳に取り組まれた経験がある。加えて古代メソポタミアの『ギルガメシユ叙事詩』の翻訳も刊行されている。古事記以外の古典、世界でもっとも多くの言語に翻訳され、長い文献学の歴史を持つ聖書について貴重な事例を取り上げていただいた。

月本氏は、聖書の日本語訳のなかに、意識的、無意識的に「日本的な」感性が入り込むことがあるという。たとえば旧約聖書のコーヘレト書のなかで、文語訳聖書で「空の空、空の空なるかな、全ては空なり」と訳されている文章がある。それが現在もっとも広く使われている新共同訳聖書では「なんとというむなしさ、なんとというむなしさ、全てがむなし」となっている。後者のほうが情感がこもった文章になる。日本人にとって理解しやすいようにも思える。そこで重要なのがコーヘレト書が「空」という世界観として語っているのか、それとも情感を表出しているのかという点である。月本氏は情感ではなく世界観であろうという。「なんとというむなしさ」は、原文からはずれてしまっている、しかしそのずれ方が日本的であると指摘した。

このように意識的、無意識的に日本的な感性で訳語が選択されることがあり、それによって原文とのずれが生じることになる。このことは古事記を現代語に訳す上でも同じ問題があるのではないかと感じた。

これらの発題を受け、ヴィータ氏がコメントを加えた。ヴィータ氏はローマ大学で長く日本学を教え、現在は京都外国語大学で教鞭をとっておられる。戦後時代に日本にやって来た宣教師の資料の調査などにも取り組んでおられるが、最近では古事記をイタリア語に翻訳したマリオ・マレガの研究をしている。幅広い経験を積まれていることから、今回のコメントをお願いした。

ヴィータ氏は脚注のあり方について、また「神」の訳語の選定の問題、解釈学的な翻訳について、そしてすでに翻訳があるものを繰り返し訳すことの意味などについて問題提起をした。

総合討議ではこれらの問題提起についての各人からの意見が述べられたが、なかでもとくに重要な課題とされたのが解釈学的な翻訳のことである。翻訳は、まったく異なった文化の読み手に伝えることになるので、翻訳先の文化を考えた意識をするという方法がある。他方で、その翻訳が古典として読まれるのか、あるいは教会で聖典として読まれるのかという使用目的によって翻訳の姿勢が変わってくることになるという。この問題はきわめて重要であり、古事記の現代語訳、また英訳にあたってはさらに議論を積み重ねていく必要がある。

紙幅の関係で議論の内容をすべて紹介することはできないが、登壇者の方々はみな「訳す」ことについて考え抜き、決断をしてこられている。その経験の一部を披露していただけたことは、古事記を海外に、また次世代に伝えていく取り組みを行っていくものとして、大変貴重な体験であった。